

久伊豆神社
(桜町)

第41話



『久伊豆』と書いて『ひさいず』と読みます。しかし『クイズ』とも読めるので、同名の神社が近年クイズ愛好家たちに評判の神社になっていくそうです。桜町の同社の祭神は大己貴命ですが、クイズの神様にされては、苦笑いしているかも知れません。

この久伊豆神社の分布には極めて特色があります。埼玉県全体を見ると、古利根川から東、つまり千葉・茨城から埼玉の東部にかけて旧下総国一の宮、香取神社を本社とする同名の神社が集中的に分布し、旧武蔵国の一の宮、大宮の水川神社と同名の神社が元荒川の西岸から多摩川にかけて、つまり埼玉県の西・南部から東京都にかけて広く分布しています。

久伊豆神社はこうした香取神社、水川神社の分布圏に挟まれた中間地帯に分布しています。この狭い地域の中に百社近くがあったようですが、どれも本社が定かでなく、また、埼玉県以外には同名の神社は無いという特色があり、極めて地域色の強い神社です。

桜町の久伊豆神社の縁起についてはあまりはっきりしていませんが、隣接する長久寺は、室町時代の応永年間、もしくは文明年間、つまり五〜六百年ほど前に城の築城に合わせ、鬼門鎮護のために造られたといわれています。本久伊豆神社もその鬼門を守る神として祭られたようです。

久伊豆神社大雷神社合殿（皿尾）

第42話



皿尾の集落の北西に小さな森に囲まれている神社で、祭神は、久伊豆社が大山祇命。大雷神が別雷神です。神社の縁起によれば、成田五郎長景が平家追討の戦いに参加するため京に向かう途中、現在の静岡県三島市にある三島明神に参拝し、武運を祈ったところ数々の功名を上げることができた。そこで行田に帰った後の文治四年（一一八八）に三島明神を勧請して久伊豆社を建立したといえます。

この神社が鎮座している場所には、かつて皿尾城が築かれました。記録によれば皿尾城は、永祿四年（一五六一）忍城主成田長泰が上杉謙信に背いたため、謙信が忍城に対抗するために築かせたものとされています。しばしば忍城の成田氏と小競り合いが行われたようですが、やがて皿尾城は成田氏に属するようになります。

さらに豊臣軍により忍城が水攻めにされた天正十八年（一五九〇）社殿は、敵軍により荒らされ、数多くの社宝が奪われ、永祿二年寄進の鰐口と天正五年寄進の鰐口のみが社前に残されていたといえます。

本社はこれらの記録から、十二世紀後半頃に成田氏により建立された久伊豆神社であることが明らかであり、中世段階でこの周辺に広く久伊豆神社が成立していたことを証明する神社として知られています。

大宮神社

(持田)

第43話



持田地区にある大宮神社は、久伊豆神社とも称され、静岡の三島神社と大宮の水川神社とが合祀されています。

創建年代は『風土記稿』によれば天正十五年（一五八七）記録によれば、今から四百年ほど前の天正年間に社殿が焼失し、時の忍城主成田氏が再建したといわれています。

久伊豆神社としては、忍城を挟んでちょうど反対側に長野の久伊豆神社が位置します。長野の久伊豆神社は、忍城の築城の時、鬼門に当たる場所に城の守り神として勧請したものといわれており、そうした意味で本神社も勧請されたとも考えられますが、はっきりしません。

大宮神社の呼称も古くからあり、忍城への出入り口の一つに大宮口がありました。

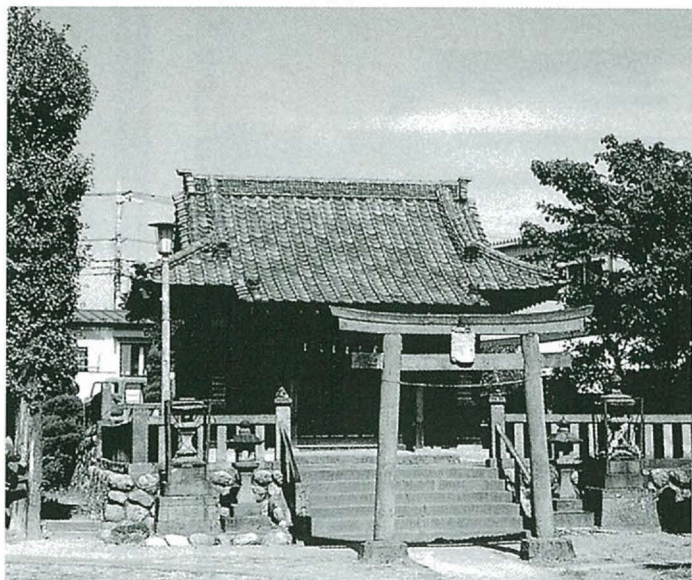
天正十八年の石田三成らの豊臣軍により水攻めされた攻防戦にも、大宮口の戦いが記録されています。

明治時代の神仏分離以前は、寺と神社は一緒でした。本神社と関係する寺は、亀行山三宝院峰雲寺といいました。江戸時代の初期、徳川家康は、忍城の周囲での鷹狩りが好きで良く来ていました。ある日鷹狩りにきていた家康が峰雲寺で休憩していると、神社の鳥居に亀が登っているのを見えました。これはめでたいきざしであると喜び、亀行山という山号を与えたといわれています。

愛宕神社

(行田)

第44話



下町の小沼橋周辺は、忍城の長野口にあたり、城下町への出入り口として重要な場所でした。ここに最も近い場所、現在の愛宕神社の所に真言宗愛宕山長徳寺は、今から四〇〇年程前に造られました。

明治時代の神仏分離により長徳寺が廃寺にされた時、境内に祭られていた愛宕社の祭神も軻遇突智命に移し変えられ、現在の愛宕神社として残されてきました。

その一方で神社の言い伝えによれば、長徳寺の創建よりもっと古く、社殿の創建は平安時代の長徳年間、江戸時代の貞享元年（一六八四）と天保六年（一八三五）に再建されたとしています。

さらに江戸時代以下町の表立であった佐野屋長左衛門が記録した『要中録』では、愛宕神社に合祀されている久伊豆社が、行田町総鎮守として八幡神社が八幡町に移る前の、古くからの行田町の総鎮守であると書かれています。

現在でも軻遇突智命を祭神とする下町の愛宕神社は火防の神様として広く信仰を集めています。特に十二月六日の西の市が大勢の参拝客でにぎわいます。熊手や大神宮売りの店が立ち並び行田の歳末の風物詩としてすっかり定着したこの祭りは、明治四〇年に氏子を中心となり始めたもので、境内に「行田西の市起源碑」があります。

愛宕神社
(忍)

第45話



江戸時代北谷通りは、本町通りから城西や谷郷方面に行く当時の中心通りでした。この通りの中程に現在の愛宕神社は祭られています。元々からここに鎮座していた神社ではありません。

新町の今津印刷所の角を奥に入った所にかつて法性寺という寺があり、その境内に社殿が祭られていたものです。この社殿はいつしか火災で焼失してしまいました。

明治初めの神仏分離に関する調査の際に代官町の黒助稲荷神社から江戸時代の正徳二年（一七一二）法性寺に建立したと書かれた内殿が発見され、これを譲り受けることになりました。ひとまず上町の吉羽家の稲荷社に安置したが、社殿がないのは寂しいと現在地を氏子富田治郎助ほか二四名が境内地として寄付し、明治十七年盛大に遷宮が行われました。当時の遷宮行列の写真が現在でも残されています。主祭神は阿彌突智命と大己貴命であり、愛宕社と事任社の二社が合祀されています。

愛宕様は、火災よけの神様として信仰されています。城下町行田では、特に冬の西風にあおられた火災は、町全体を焼き尽くす事もありました。そうした経験から土蔵造りの家や北側と西側を軒先まで塗り込めた家がたくさん造られ、現在でも見ることが出来ます。行田の町では火災は西からやってくる経験から学んできたのです。

天神社
(佐間)

第46話



新町の通りを佐間方面に行くと天満を過ぎたあたりに森が見えます。ここが天神社の境内で、道を挟んで、戦国時代の天正十八年、忍城水攻めに佐間口を守備した正木丹波守の墓がある高源寺が位置します。『忍城戦記』などにある佐間口の攻防戦を感じ取る霧閉気を残している場所でもあります。

この天神社の由来については、記録によれば江戸時代の享保五年（一七二〇）十二月京都の吉田家より神位を与えられ、正一位天満天神と称するようになり、また文化十年（一八一三）にも社殿を再建したとの記録があります。

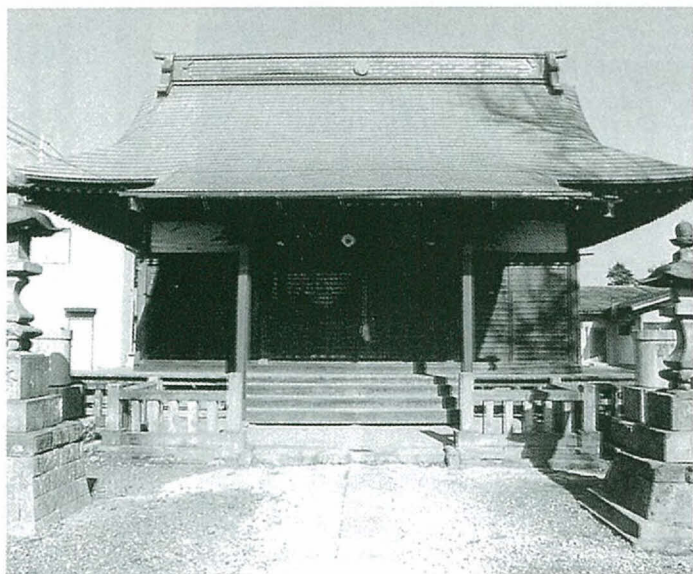
祭神は木造寄木造彩色の天神坐像で、胎内にもまた神像を蔵するといわれています。一般に「天神さん」と呼ばれて親しまれているこの神様は、平安時代の実在した人物、菅原道真を祭ったものです。

恨みを残して没した道真の祟りを恐れ、神として祭り拜んできたものが、時代とともに信仰の形態が変わり、道真が学者、政治家、文人として優れていたことから、詩歌、文筆、学問の神様として崇敬されるようになってきたものです。今では学問の神様としての人気が高く、全国で1万社を越えるといわれます。これから本番を迎える受験生にとっては頼もしい神様です。

天満天神社

(荒木)

第47話



行田市の北東部、荒木小学校から羽生の新郷に向かう道の右側にあります。この道はかつて日光脇往還と呼ばれ、中山道の鴻巣から忍城の城下町である現在の行田の市街地を通り、羽生の川俣で利根川を渡り館林を経て日光に向かう街道として利用されてきました。

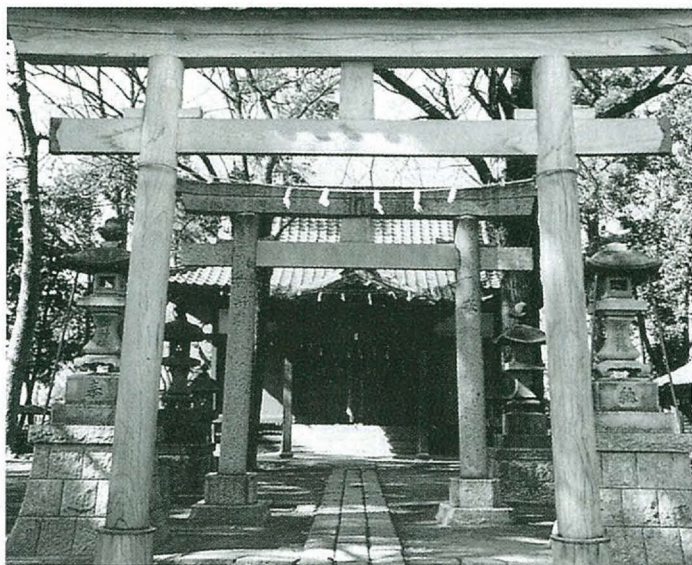
拜殿の中に掛かっている天満宮の額には、金網が被せられています。これには、昔神社の脇の往還を通る馬が神社の所にくると暴れるのでこまっていたが、額に金網を被せたところ、暴れることが無くなったという話が残されています。

祭神は菅原道真で、高さ十七センチほどの座像を祭っています。言い伝えによれば、いつのころか水害により当地に流れついたので祭ったのが始まりであるといわれており、創建年代の不明な時によく言われる形を残しています。

境内の出入口のすぐ右側に、小さな塚があります。この塚は浅間塚と呼ばれ、富士山を象ったものです。第二次世界対戦頃までは浅間講が組織され、旧暦七月二日に火祭りが行われていました。この祭りでは、オネリと称し、白装束姿で講元の家から行列を組んで浅間塚まで行き、境内に積み上げた薪に火をつけ、その明りの中で祈禱が行われました。この浅間塚は市内でも数少ない富士塚として大変貴重なものです。

春日神社
(谷郷)

第48話



成田氏が、忍城築城に際して堀の水源となる場所に大樋を設け春日神社を勧請し、排水の水門のある場所に佐間の天神社を配置、堀の水を出し入れする施設を隠すためであったと言われます。その当否は実際の大樋水門の遺構が確認されていませんから判断できませんが、地形的には理に適っています。

荒川扇状地が終わる中里や皿尾地区付近で伏流水が噴き上がります。地形的にはここから城のあった市役所のある方向、さらには下忍、堤根方向に緩やかに下がっていき、水はこの方向に流れるからです。

祭神は武甕槌命・斎主命・天児屋根命・比売神で、藤原氏の氏神である奈良の春日大社を本社としています。

春日神社の神様は、子どもが大好きで、子どもたちが神様も暑かろうと神像を川にいれ、一緒に遊んでいたところ、神主があわてて取り返しきれいにして元に戻したがその晩から高熱を出しました。占いで見てもらうと、神様が子どもたちと楽しく遊んでいたのに、子どもをしっかりとばして川から上げてしまったためだと分かりお詫びするとたちまち直ったというお話があります。他に、神社の鹿を殺してしまったために、数日後同じ場所で不思議な死に方をした話もあり、境内に鹿を祭った祠があります。

子安神社

こやす

(下池守)

第49話



星宮小学校の東側を通る通称農免道路を北に行き、丁字路で突きあたる所にあります。

祭神は木乃花咲耶媛。この神は、富士山の神とされ、浅間神社の祭神として広く信仰されてきたことは、前に前玉神社のところでも説明しました。

記録によれば、嬰兒に乳を含くませている形の小さな金銅の神像と水晶の如き子安の玉、濃墨の如き子育石が祭られています。

戦国時代の天正十八年、石田三成らの忍城攻めの時、浅野長政の軍勢により神社は焼失しましたが、村人はこのことを恐れ、事前に神像と二つの神宝を土中に隠し目印として栢の木を植えておいた。江戸時代の中頃の元禄年間に、この栢の木が大きくなり、夜毎根元から光を放っていた。そこで栢の木を切ってみると壺に入っていた神像と二つの神宝を発見し、さっそく神社を再建したといわれています。

江戸時代に書かれた『忍名所図会』によれば、この神像は、神功皇后と応神天皇の母子像であり、婦人祈れば安産せずということなし、靈験あらたかなりと評判だったようです。

さらに子供が無事に生まれたお礼に奉納された扇、団扇が社中に満ちあふれていると、今も昔も安産、子育てに対する親の気持ちが変わらないものであることを伝えています。

熊野神社
(須加)

第50話



須加小学校の西側に利根川を背にして鎮座していますが、昭和三六年の堤防拡張により南に四〇メートルほど社殿が移動されています。

創建時期については、今から六百六十年ほど前の室町時代の最初の頃に創建されたと伝えられていますが、古い記録は焼失しているそうです。

祭神は、家都御子神、熊野夫須美命、速玉男命とされます。

本社は、名前のとおり、和歌山県の南部にある熊野三山を中心とする熊野信仰により勧請されたもので、家都御子神は、熊野三山の中心である熊野本宮大社の祭神。熊野夫須美命は、那智大社の祭神。速玉男命は、速玉大社の祭神になります。

ここに伝わる話の中に、妻沼の聖天様に関するものがあります。

昔熊野神社の境内地に聖天様があったが、縁結びのご利益があらたかであると、大いににぎわった。そのため熊野神社の方の影が薄くなり、このままでは聖天様にとられてしまうとそれぞれ、聖天様を氏子たちが松葉でいぶり出してしまった。やむなく聖天様は妻沼に移ることになったが、途中の北河原に来ると大雨にあい、雨宿りのため一泊した。そのためこの地を「雨の袋」と呼ぶようになったというものです。雨の袋は現在良き字をあて天袋の小字名として残っています。